

英語の複合不定代名詞 **something** を含む 名詞句における形容詞の生起位置に関する 形態統語論的研究

増 富 和 浩

1. はじめに
2. 名詞句における形容詞の生起位置について
3. **Something** を含む名詞句における形容詞の生起位置について
4. 名詞句内での形容詞の修飾に課せられる制約
 - 4.1. 名詞句内での形容詞の前位修飾に課せられる制約
 - 4.2. 名詞句における後位修飾と N 移動分析
 - 4.3. HFF, FOFC に関する再考
5. 複合不定代名詞 (CIP) を伴う名詞句における形容詞の後位修飾について
6. まとめ

1. はじめに

英語では、*some*、*any*、*every* などの限定詞（あるいは数量詞）が、*one*、*body* や *thing* などの名詞と結びつくことにより *someone*、*somebody* や *something* などの複合不定代名詞 (compound indefinite pronouns : CIP) が形成される。1 語の形容詞が名詞を修飾する場合、通常は形容詞 (adjective : A) が被修飾部の名詞 (noun : N) に先行し、A+N の語順を形成する。一方、形容詞が *something* などの CIP を修飾する場合は、形容詞が後続し CIP+A の語順を形成しなければならない (e.g. *something cold* / **cold something*)。この事実は、形態統語論的に興味深い事実であり、これまでも議論が続けられてきた (Escribano (2004), Kishimoto (2000), 岸本・菊地 (2008), Larson and Marušič (2004), 松倉 (2015), 中島 (2004), Quirk et al. (1985), Salender and Arnold (1994), Svenonius (1994) などを参照)。

名詞句内で形容詞が被修飾部に対して前位されるか後位されるかという問題についての理論的な説明として、Emonds (1976, 1985) や Williams (1982) などが提案する主要部末尾フィルター (Head-Final Filter) や Sheehan et al. (2017) の Final-over-Final Condition (FOFC) と呼ばれる名詞句の派生に課せられる制約による説明がある。また、Kishimoto (2000) や中島 (2004) は名詞句

で生じる N 繰り上げ操作による説明を提案している。本稿では、これらの先行研究における議論を検討したうえで、岸本・菊地（2008）の統語構造構築に関わる基本原理にもとづく分析を参考に、英語の CIP の実例として *something* を含む名詞句を中心に議論し、なぜ英語では CIP+A（後位修飾）の語順が文法的で、A+CIP（前位修飾）の語順が非文法的であるのかという問題について形態統語的な観点から考察を行う。そのような議論の結果として、CIP+A の語順が生じるメカニズムは、CIP の内部構造と統語構造を構築する基本原理の観点から説明されることを示す。

本稿の構成は以下のとおりである。次節では、名詞句における形容詞の生起位置についての特徴を整理する。3 節では、名詞句における複合不定代名詞（CIP）と形容詞との関係について確認する。4 節では、名詞句における限定用法の形容詞の生起位置を説明する先行研究を概観する。5 節では、英語の CIP を修飾する形容詞の生起位置に関する本稿の分析を提案する。6 節で本稿の議論をまとめる。

2. 名詞句における形容詞の生起位置について

形容詞の統語的な機能として、be 動詞など第 2 文型を形成する動詞の補部として生じ、主語と叙述関係を結ぶ叙述用法と、名詞句内で形容詞を修飾し、被修飾要素である名詞が表す意味の集合を限定する限定用法がある¹。(1) の例の斜体部は叙述用法の形容詞、(2) の例文の斜体部は限定用法の形容詞をそれぞれ示している。形容詞のこれら 2 つの機能のうち、本稿では名詞句内での被修飾部の名詞と限定用法の形容詞の語順について論じる。

- (1) a. He is very *clever* and is not *proud* either. (『ランダムハウス英和大辞典 第 2 版』)
 b. He is *strong, brave* and, above all, *kind*. (『ジーニアス英和辞典 第 5 版』)
- (2) a. They devised a *clever* plan to increase sales. (『オーレックス英和辞典 第 2 版』)
 b. The *strong* wind almost blew me over. (『新英和大辞典 第 6 版』)

限定用法の形容詞が 1 語で名詞句に生じる場合、形容詞は被修飾部の名詞に先行しなければならない。その場合、(不)定冠詞、(形容詞用法の)指示代名詞や所有格(代)名詞などの限定詞は形容詞に先行詞し、(3) の語順を生じる。しかし、同じ構成要素を用いた場合でも、形容詞と名詞の位置が逆転した(4) の語順は許されない。

- (3) $\left. \begin{array}{l} \text{the / a(n)} \\ \text{this / that} \\ \text{some / any} \\ \text{John's} \end{array} \right\} \textit{expensive car}$ (岸本・菊地 2008)

- (4) * $\left. \begin{array}{l} \text{the / a(n)} \\ \text{this / that} \\ \text{some / any} \\ \text{John's} \end{array} \right\} \text{car } \textit{expensive}$

ただし、これには例外があり、形容詞が前置詞句などの補部要素を伴う場合 (5a) や、叙述用法のみで用いられる *alive* などの一部の形容詞の場合 (5b)、あるいは、形容詞が被修飾要素である名詞の「一時的な性質・状態」を表す場合 (5c) は、名詞を後位修飾することが可能であることが観察されている²。

- (5) a. a car *similar to mine* (岸本・菊地 2008)
 b. The boat *afloat* (now / for a while) will go under the bridge. (中島 2004)
 c. The rivers *navigable* (at this time of year) are all inaccessible. (Sadler and Arnold 1994)

(5b) の例に用いられる形容詞の数は限られており、*absent*, *present*, *concerned*, *involved* と a- で始まる形容詞 (*abroad*, *afloat*, *afloat*, *afloat*, *afloat*, *afloat*, *afloat* など) であることが指摘されている (Quirk et al. 1985, 中島 2004)。また、前位修飾の形容詞に関連する語句が被修飾部の名詞の後に生起することが可能な場合がある。

- (6) a. a *comparable* situation to ours
 b. a *preferable* solution to Chomsky's
 c. a *taller* woman than Mary
 d. a *famous* actress for her Lady Macbeth
 e. a *lucky* woman in her field
 f. a *strong* department in semantics
 g. a *brave* man to jump into the icy water
 h. a *wise* man to keep his mouth shut (岸本・菊地 2008)

このような現象は、AP 分離 (AP Splitting) と呼ばれ、(6a-c) では形容詞と意味解釈の点で密接に関連した補部が、被修飾部の名詞に後続している。(6d-h) では、前位修飾している形容詞と意味上修飾関係にある語句 (付加部) が名詞の後に生じている。(6d-f) では前置詞句が、(6g, h) では不定詞節が付加部として名詞に後続している。ただし、AP 分離が許されるのは、比較の解釈を持つ形容詞に限られ、その他の形容詞が補部や付加部と分離することは許されないとされている。

以上の事実に基づけば、名詞句において形容詞が名詞を修飾する語順は、A+N が原則であり、結果として、形容詞は名詞を前位修飾することになる。

3. **Something** を含む名詞句における形容詞の生起位置について

前節では、被修飾部が1語の名詞である場合、形容詞は原則として名詞を前位修飾し、A+Nの語順を形成するという事実を確認した。本節では、名詞句において限定用法の形容詞が **something** などの複合不定代名詞 (CIP) を修飾する場合の語順について確認することにする。

英語では、CIPは限定詞要素の *every-*, *some-*, *any-* や *no-* が、名詞要素の *-one*, *-body*, *-thing* と結合することにより形成される (Quirk et al. 1985)。CIPは、これらの限定詞要素と名詞要素の組み合わせの点から、下表のように大別される (Quirk et al. 1985: 377)。英語史を通じて、CIPの初出は、*-thing* を伴う *something*, *anything*, *nothing* が最も古く12世紀以前とされ、他のCIPはそれよりやや遅れるとされる (『ジーニアス英和大辞典』)。

Table. 1 Compound Pronouns

	Personal Reference		Nonpersonal Reference
Universal	<i>everybody</i>	<i>everyone</i>	<i>everything</i>
Assertive	<i>somebody</i>	<i>someone</i>	<i>something</i>
Nonassertive	<i>anybody</i>	<i>anyone</i>	<i>anything</i>
Negative	<i>nobody</i>	<i>no one</i>	<i>nothing</i>

Quirk et al. (1985) はこれらのCIPは複合語であると指摘している。この指摘は、CIPが形態的に1語であること、およびCIPの強勢配置が、第二要素に強勢が置かれる句の強勢型ではなく、第一要素に強勢が生じる複合語の強勢型を示している事実と矛盾しない³。

- (7) a. *éverything*
 b. *sómthing*
 c. *ányòne*

CIPが複合語であるという指摘とは対照的に、(8)のように、*almost*などの副詞が*everyone*を修飾できるという事実にもとづいて、*everyone*などの不定代名詞は、1語ではなく2語の独立した形態素と考えるべきであるとの指摘がある (Kishimoto 2000, 中島 2004)。この指摘は、形容詞や副詞などは、語内部の一部の要素のみを修飾することはできないという (9) が示す事実に基づくものである。

- (8) *almost / virtually / nearly everyone* (Kishimoto 2000)

- (9) a. **a very [hot dog]*

 b. **a very [small talk]* (ibid.)


しかし、Kishimoto (2000) や中島 (2004) の指摘は、every- を含む例にのみ基づくものであり、someone や something のような他の CIP については議論していないため、本稿では、Quirk et al. (1985) が指摘する形態的な特徴と強勢型に関する事実により、CIP は基本的には 1 語の複合語として統語構造に導入されると考えることにする。CIP を複合語と分析することの利点については、4 節でも再度論じることとする。

名詞句内で CIP が形容詞による限定修飾を受ける場合に注目すると、(10) が示すように、形容詞が補部や付加部を伴わない 1 語の場合であっても後位修飾が原則であり、前位修飾は許されない。また、(11) に示すように、後位修飾の場合は形容詞が副詞要素に修飾されることが可能であり、形容詞が前置詞句などの補部や付加部を取ることも可能である。また、等位修飾された複数の形容詞がさらに前置詞句を伴って名詞を後位修飾することも可能である。

- (10) a. everything *interesting* / **interesting* everything
 b. something *delicious* / **delicious* something
 c. someplace *cold* / **cold* someplace (Kishimoto 2000)
- (11) a. somebody
 b. something *nice* for dinner
 c. anyone *kinder* and *more considerate* than Janice (Quirk et al. 1985)

なお、松倉 (2015) が示しているように、something を構成要素とする名詞句において形容詞による前位修飾の例が観察される。

- (12) a. Here's a *little* something for you.
 b. She wore a *filmy* something that tied at the throat.
 c. I felt the presence of an *unknown* something.
 d. It is only an *indeterminate* something.
 e. An *unacceptable* something seemed always to prevent their getting further.
 f. "Talking about *large* somethings," he went on dreamingly, "I generally have a small something about now—about this time in the morning."
 (松倉 2015)

ただし、これらの例に用いられている something は、松倉 (2015) でも指摘されているように、A + something が不定冠詞を伴っていることから、いずれも CIP ではなく名詞である考えられる。(12f) では、somethings という複数形となっている点も、something が名詞であることを示唆しており、多くの英和辞典においても something に名詞の用法があることが記述されている。なお、名詞の something の意味には、CIP 本来の「何かあるもの」という意味以外に、「何か食べる [飲む] もの」「重要人物、けっこうな事」などの意味があることが記述されている (『ジーニアス英和大辞典』な

ど)。これは、something が品詞転換して語彙化したことにより生じた意味であると考えられる。

以上の事実を踏まえ、本稿では、名詞句における限定用法の形容詞の生起位置が、被修飾部の名詞が car や book のような語根名詞である場合の A+N (前位修飾) とは対照的に、被修飾部が something などの CIP の場合は、なぜ N+A (後位修飾) でなければならないのかという問題について、形態統語論の観点から理論的な考察を以下に示す。

4. 名詞句内での形容詞の修飾に課せられる制約

本節では、名詞句内部での前位修飾に課せられる制約として、Escribano (2004) や Williams (1982) などが提案する主要部末尾フィルター (Head-Final Filter (HFF)) と Sheehan et al. (2017) が提案する Final-over-Final Condition (FOFC) に基づく分析を概観する。次に、Kishimoto (2000) および中島 (2004) が提案する名詞句内部での N 繰り上げ分析、さらに、岸本・菊地 (2008) が提案する統語構造構築に関する基本原理に基づく分析を検討する。

4.1 名詞句内での形容詞の前位修飾に課せられる制約

岸本・菊地 (2008) は、(14) の文法性の対比を Escribano (2004) や Williams (1982) などが提案する (13) の主要部末尾フィルター (Head-Final Filter) により説明する可能性について考察している。

(13) 主要部末尾フィルター (Head-Final Filter (HFF)) :

前位修飾の句では、主要部が末尾に生起しなければならない。

(岸本・菊地 2008)

(14) a. a [[_{AP} keen] student]

b. a student [_{AP} keen [_{PP} on jazz]]

c. *a [_{AP} keen [_{PP} on jazz]] student

(Escribano 2004)

(14a) では、前位修飾の形容詞が形容詞句 (AP) の唯一の構成要素であるため、形式的には末尾に生起していると考えられることができるので、(13) の HFF に違反せず文法的である。(14b) は形容詞句 keen on jazz が student を後位修飾しているため、HFF の制約からは自由であるため文法的である。一方、(14c) は、AP が student を前位修飾しており keen が AP の末尾に生起していないため、HFF に違反し非文法的となる。

また、Sheehan et al. (2017) によれば、FOFC は以下のように定義され、名詞句における形容詞の前位修飾に関して HFF と同様の効果を生じる。

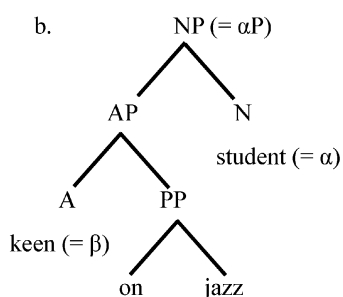
(15) Final-over-Final Condition (FOFC) :

A head-final phrase αP cannot immediately dominate a head-initial phrase βP , if α and β are

members of the same extended projection.

(15) の定義によれば、 $[_{AP} [_{PP} \beta\gamma] \alpha]$ の構造は非文法的である（つまり、 $*[_{AP} [_{PP} \beta\gamma] \alpha]$ となる）。(14c) に対して当てはめてみると、(16a) の構造においては、 $\alpha=N$ (student)、 $\beta=A$ (keen) であるため、 $*[_{AP} [_{PP} \beta\gamma] \alpha]$ の構造に合致し、非文法的である。また、(16a) の統語構造を樹形図で示した (16b) で考えると、名詞 student と形容詞 keen が共通の拡大投射 (extended projection) である NP の構成要素であり、主要部終端構造の句 (head-final phrase) NP が、主要部先導構造の句 (head-initial phrase) AP を直接支配しているため、(15) が定義する構造関係に合致し非文法的である。

(16) a. $*[_{NP} [_{AP} [_{A} \text{keen}] [_{PP} \text{on jazz}]] [_{N} \text{student}]]$



このように、HFF や FOFC は名詞句における限定用法の形容詞と名詞の語順に関する文法性を説明できるため、本稿で議論しているような something cold などの場合に、複合不定代名詞 (CIP) が形容詞に後位修飾されなければならない理由を説明できる可能性がある。しかし、このような制約は、前位修飾構文の文法性を説明するためにのみ用いられる一般性を欠いた制約であると考えられる (岸本・菊地 2008)。

4.2. 名詞句における後位修飾と N 移動分析

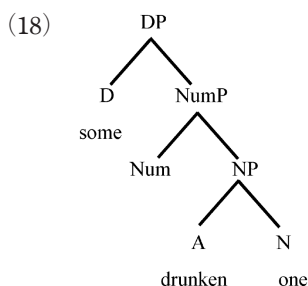
中島 (2004) は、Kishimoto (2000) の分析を踏まえ、something などの不定代名詞は、基底構造においては、some と thing の 2 語であると仮定し、(17a) のような形容詞が不定代名詞を後位修飾する名詞句の構造 ($[_{DP} \text{something} + A]$) は、thing が基底位置 ($[_{DP} \text{some } A \text{ thing}]$ の構造において形容詞に後続する位置) から形容詞よりも上位の位置へ N 繰り上げ (あるいは N 前置) することにより派生されるとという分析を行っている。

(17) a. something tall

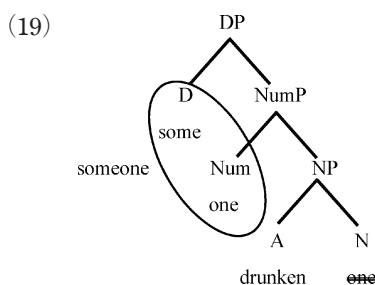
b. $*\text{tall something}$

中島 (2004) においては、CIP+A の基底構造は具体的には以下のように説明されている。例えば、someone drunken の場合、派生の最初の段階で、形容詞 drunken が代名詞 one と併合され NP が形成される。次に、名詞句は「数」に関する屈折を示すことから機能範疇として Num (number) が

生起し、NP と併合され数句 NumP (number phrase) が形成される。最後に限定詞 *some* が NumP と併合され (18) の構造が形成される。



この構造では *some* と *one* が分離して存在しているが、中島 (2004) は、代名詞 *one* が一種の接辞であると仮定し、具体的な要素が生起せず空である主要部 Num に移動し、D にある *some* などの限定詞と一語化しなければならないと分析している⁴。この結果、下記の構造が形成され、発音の段階で *some* と *one* が一語化されることで、*someone drunken* の語順が生成されると議論している。



この分析においては、*someone* などの不定代名詞が基底構造では 2 語として独立しているという仮定が重要となるが、その根拠として、上述したように *almost* などの数量詞を修飾する副詞が *everyone* を修飾することが可能であるという事実を示している。通常、副詞などの修飾語は、語の一部のみを修飾することはできない。つまり、複合語の *blackboard* (「黒板」) の一部である *black* を *very* などで修飾することはできない (**very blackboard*)。一方、(20) は、*almost* が *every* を修飾していると考えられるため、*everyone* は基底構造では 2 語であることを示すと分析している。(Kishimoto 2000, 中島 2004)。

(20) *almost / virtually / nearly everyone* (= (8)) (Kishimoto 2000: 561)

しかし、すでに述べたように、本稿では、*someone* や *something* などの複合不定代名詞 (CIP) は本来 1 語の複合語であると考えているので、中島 (2004) および Kishimoto (2000) の分析は支持しない。なお、CIP が実は 2 語である根拠を示すとする (20) の例は、*every* を含む例のみで、*someone* や *something* に関連する例は示されていないこともすでに指摘したとおりである。また、

上記の分析では、N 繰り上げを駆動する要因として、one や thing がある種の接辞だと仮定しているが、one や thing には接辞としての用法は辞書にも記述されていない。従って、Kishimoto (2000) や中島 (2004) の分析は、仮説の段階を出ていないと考えられる。

以上により、CIP と形容詞の語順を説明する方法として、本稿では HFF, FOFC および N 繰り上げ分析は支持しない。

4.3. HFF, FOFC に関する再考

岸本・菊地 (2008) は、すでに議論した名詞句内部での形容詞の後位修飾に課せられる制約として提案された HFF, FOFC の効果を、ミニマリスト・プログラムにおける統語構造構築に関わる基本原理によって還元する方法について検討している。ミニマリスト・プログラム (詳細は Chomsky 1995 およびそれ以降の議論を参照) の枠組みでは、統語構造は併合 (Merge) と呼ばれる操作を主要部と補部 (V+目的語など) に適用し、その統語構成物と指定部要素 (主語など) にも適用することにより、[指定部 [主要部—補部]] の基本構造が形成される。岸本・菊地 (2008) は、この基本的な統語構造の形成過程は、CIP+A の形成過程にも適用可能であると論じている。その際に (21) の仮定を採用している。

(21) Merge によって組み合わされた 2 要素のうち、充足されていない選択素性を持つ要素が投射し、全体の句の標示 (label) を決定する。

(岸本・菊地 2008: 104)

(21) の定義に従えば、a girl afraid of dogs のような形容詞句による後位修飾構造の場合、まず afraid が前置詞句 of dogs と併合される。ここで、形容詞 afraid が外項 (叙述対象) をとる選択素性が充足されていないため、A が投射し afraid of dogs の標示が AP となる。次に AP の指定部に girl が併合される。ここで、A の選択素性は充足されているが、girl は D (冠詞など) によって選択されなければならないという素性を残しているため、N が投射し全体の標示が NP となる。これにより、(22) の形容詞による名詞の後位修飾の構造が正しく形成される。一方、(23) の誤った構造は、[指定部 [主要部—補部]] の英語の基本構造に合っていないため許されないと考えられる。従って、岸本・菊地 (2008) 議論によれば、HFF, FOFC といった記述的な制約を排除でき、N 繰り上げといった恣意的な操作も排除できる。

(22) girl + [afraid of dogs] ⇒ [_{NP} girl [_{AP} afraid of dogs]]
指定部 主要部 補部

(23) *a [_{NP} [_{AP} afraid of dogs] girl]
*主要部 補部 指定部

同様に、岸本・菊地 (2008) の分析においては (24) のような一語の形容詞が被修飾部の名詞を

後位修飾する例は (25) の構造を形成すると分析され、(22) と同様に文法的な派生であると説明されている。

(24) the river navigable (Bolinger 1967, 岸本・菊地 2008)

(25) (the) [_{NP} rivers [_{AspP} Asp [_{AP} navigable]]]

指定部 主要部 補部

この構造には相 (aspect) に関する情報を表す相句 (aspect phrase: AspP) が生起しているが、このことは、(24) のような 1 語の形容詞が名詞を後位修飾する場合は、その形容詞は被修飾部の名詞の「一時的な性質・状態」を表すと解釈されるという指摘に基づいている (この点に関する詳細は、Bolinger 1967, Quirk 1985, Sadler and Arnold 1994 などを参照)⁵。

以上のように、HFF および FOFC といった制約や N 繰り上げといった余剰的な操作を名詞句の派生に関する議論から排除できることに注目し、次節では、岸本・菊地 (2008) の分析にもとづいて、CIP はなぜ形容詞 (句) に後位修飾されなければならないかという問題を議論することにする。

5. 複合不定代名詞 (CIP) を伴う名詞句における形容詞の後位修飾について

前節までの議論にもとづいて、本節では、以下のような CIP を伴う名詞句において形容詞の後位修飾が生じる派生過程について議論する。

(26) a. something delicious (= (10b))

b. something nice for dinner (= (11b))

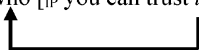
まず something delicious の場合から議論する。本稿では、岸本・菊地 (2008) の分析を踏まえて、(26a) の派生構造は以下のものであると分析する。

(27) (the) [_{NP} something [_{CP} C [_{AP} delicious]]]

この構造では、前節の AspP ではなく CP が生起しているが、これは CIP に後続する形容詞は、(28) に示すように、関係節が省略されたものであると考えられていることを踏まえたものである (Quirk et al. 1985, 『ウィズダム英和辞典 第 3 版』)。また、関係節の統合構造は (29) のように分析され、CP が先行詞となる名詞と併合された NP 構造であると分析されている (中村・金子 2002)。(29) において、関係代名詞 who は関係節内の動詞 trust の目的語位置から CP の指定部位置へ移動し元位置に痕跡 (trace: *t*) を残している。本稿の議論には特に関係がないため、ここではこれ以上は関係節の派生過程については議論しないことにする。

- (28) a. something (that is) *different*
 b. something (that is) *larger* (Quirk et al. 1985)

- (29) [NP a friend [CP who [IP you can trust *t*]]] (中村・金子 2002)



(27) の構造に議論を戻すと、前節の (25) の場合と同様に、C は形容詞 *delicious* と併合される。この構造で、関係節内で *be* 動詞の後に生じ叙述用法として用いられていた *delicious* は、これ以上の要素の選択を必要としないが、C は先行詞の NP と併合される必要があり、その選択素性を満たされていない。従って、C が投射し関係節全体の標示は CP となる。次に、CP と *something* が併合される。ここで、*something* は D により選択される素性が充足されていないため、*something* が投射し全体の標示が NP となり、以下の構造を形成する。この構造は、前節で確認した英語の基本構造である [指定部 [主要部—補部]] に合っているため文法的である。

- (30) [DP D [NP something [CP C [AP *delicious*]]]]
 指定部 主要部 補部

最後に、(26b) の *something nice for dinner* などの後位修飾の形容詞が補部や付加詞を伴った場合については、以下の構造が形成されると分析できる。

- (31) [DP D [NP something [CP C [AP *nice for dinner*]]]]
 指定部 主要部 補部

この構造において、*something* に後続する関係節内の形容詞 *nice* は付加部の前置詞句 *for dinner* を伴っている。この場合も *nice* は *be* 動詞の後に生じる叙述用法であるため選択素性はすでに充足されており、C との併合によって、C が投射し CP が形成されている。*something* と CP の併合においては、前例の (30) と同様に *something* の選択素性が残っているため、N が投射し全体の標示は NP である。この構造も、英語の基本構造である [指定部 [主要部—補部]] に合っているため文法的である。以上の派生とは対照的に、(26a, b) において形容詞節が *something* を前位修飾した場合の構造は、(32) および (33) となり、英語の基本構造に合っておらず、非文法的であると判断できる。

- (32) *[DP D [NP [CP C [AP *delicious*]]] something]]
 主要部 補部 指定部

- (33) *[DP D [NP [CP C [AP *nice for dinner*]]] something]]
 主要部 補部 指定部

6. まとめ

以上のように、本稿の分析では、something などの複合不定代名詞を形容詞が後位修飾しなければならない事実に関して、ミニマリスト・プログラムの構造構築の基本原理の点から理論的な説明を行った。これにより、従来の分析において仮定されていた主要部末尾フィルター（HFF）や Final-over-Final Condition（FOFC）といった記述的な制約、および名詞句内での N 繰り上げという経験的な操作を名詞句の派生過程を議論する理論から排除できることを示した。

注

1. 英語の形容詞の特性に関する詳細は、Quirk et. al (1985)などを参照されたい。
2. より詳細な議論については、Bolinger (1967) や Quirk (1985) なども参照されたい。
3. 句と複合語の強勢配置の特徴に関しては、窪蘭・太田 (1998) などが詳しく議論している。
4. 名詞句の内部構造に関するより詳細な議論については、Abney (1987) が提案する DP 仮説に関する議論などを参照されたい。
5. 名詞の「一時的な性質・状態」を表す形容詞はステージレベル述語 (stage-level predicate) と呼ばれている。この点に関する議論については、Carlson (1977) などを参照されたい。

参考文献

- Abney, Steven (1987) *The English Noun Phrase and Its Sentential Aspect*, Doctoral dissertation, MIT.
- Bolinger, Dwight (1967) "Adjectives in English: Attribution and Predication," *Lingua* 18, 1-34.
- Carlson, Greg N. (1977) "A Unified Analysis of the English Bare Plural," *Linguistic and Philosophy* 1, 413-457.
- Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*, Cambridge, MA: MIT Press.
- Emonds, Joseph (1976) *A Transformational Approach to English Syntax*, New York: Academic Press.
- Emonds, Joseph (1985) *A Unified Theory of Syntactic Categories*, Dordrecht: Foris.
- Escribano, J. L. Gonzalez (2004) "Head-Final Effects and the Structure of Modification," *Journal of Linguistics* 40, 1-43.
- Kishimoto, Hideki (2000) "Indefinite Pronouns and Overt N-Raising," *Linguistic Inquiry* 31, 557-566.
- 岸本秀樹・菊地 朗 (2008) 『叙述と修飾』東京：研究社。
- 窪蘭晴夫・太田 聡 (1998) 『音韻構造とアクセント』東京：研究社出版。
- Larson, Richard K. and Franc Marušić (2004) "On Indefinite Pronoun Structures with Aps: Reply to Kishimoto," *Linguistic Inquiry* 35, 268-287.
- 松倉信幸 (2015) 「Something の意味と機能」『英語と文学、教育の視座』渋谷和郎・野村忠央・土居 峻 (編) 302-311, 東京：DTP 出版。
- 中島平三 (2004) 「後位形容詞とフェイズ (上・下)」, 『英語青年』第 150 巻, 494-497, 551-554, 東京：研究社。
- 中村 捷・金子義明 (編) (2002) 『英語の主要構文』東京：研究社。
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.

- Sadler, Louisa and Douglas J. Arnold (1994) "Prenominal Adjectives and the Phrasal / Lexical Distinction," *Journal of Linguistics* 30, 187–226.
- Sheehan, Michelle, Theresa. Biberauer, Ian Roberts, and Anders Holmberg (2017) *The Final-Over-Final Condition: A Syntactic Universal*, Cambridge, MA: MIT Press.
- Svenonius, Peter (1994) "The Structural Location of the Attributive Adjective," *Proceedings of the Twelfth West Coast Conference on Formal Linguistics*, ed. by Eric Duncan, Donka Farkas, and Philip Spaelti, 439–454, CSLI, Stanford.
- Williams, Edwin (1982) "Another Argument that Passive is Transformational," *Linguistic Inquiry* 14, 287–308.

<辞書・学習参考書など>

- 『ジーニアス英和大辞典』東京：大修館書店.
- 『ジーニアス英和辞典 第5版』東京：大修館書店.
- 『オーレックス英和辞典 第2版』東京：旺文社.
- 『ランダムハウス英和大辞典 第2版』東京：小学館.
- 『新英和大辞典 第6版』東京：研究社.
- 『ウイズダム英和辞典 第3版』東京：三省堂.

A Morphosyntactic Study on the Structural Position of Adjectives in Noun Phrases with the English Compound Indefinite Pronoun *something*

MASUTOMI Kazuhiro

In English, determiners (or quantifiers) such as *some*, *any*, *every*, and *no* are combined with nouns such as *one*, *body*, and *thing* to form compound indefinite pronouns (CIP) such as *someone*, *somebody*, or *something*. An adjective (A) modifying a noun (N) usually precedes the modified noun, evincing the A+N word order. Conversely, an adjective modifying a CIP such as *something* must use the CIP+A word order (e.g., *something cold*/**cold something*). Several studies have discussed this morphosyntactically interesting fact (Escribano 2004, Kishimoto 2000, Kishimoto and Kikuchi 2008, Larson and Marušič 2004, Matsukura 2015, Nakajima 2004, Quirk et al. 1985, Salender and Arnold 1994, Svenonius 1994, etc.).

Emonds (1976, 1985) and Williams (1982) propose analyses grounded in the Head-Final Filter (HFF) to examine whether an adjective should precede or follow a noun in a nominal phrase. Sheehan et al. (2017) attempts to elucidate this issue through the imposition of a constraint called the Final-over-Final Condition (FOFC) on the derivation of noun phrases. Other analyses of this inquiry include explanations based on N-raising operations applied to the derivation of noun phrases (Kishimoto 2000 and Nakajima 2004).

This paper follows fundamental principles applied to the syntactic structure by Kishimoto and Kikuchi (2008) after due consideration of the deliberations effected in the abovementioned previous investigations. In so doing, it contemplates noun phrases with *something* as exemplars of English CIP and demonstrates that the mechanism producing the word order CIP+A can be explained through the basic principles of syntactic structures.